

「国際理解教育の研究」の授業公開とFDに関する考察

教育学部 手嶋 將 博

<公開した授業>

＊科目名：「国際理解教育の研究」

＊日 時：2009年11月10日（火曜日）2限

＊教 室：13403教室

1. はじめに

2009（平成21）年11月10日（火）の、文教大学教育研究所FD研究の一環として実施した筆者の公開授業は、秋学期火曜2限の選択科目である「国際理解教育の研究」であった。これは、年度や時間枠によって履修者数は変わるが、おおよそ10～30名で比較的小規模な授業である。

今回、公開授業としてこれを選んだ理由は、前年度に行った2つの公開授業が、30人前後の学生たちによるグループ別の研究・発表を主体とし、教員はファシリテーター（水先案内人）役として彼らの研究・発表のバックアップを行う形式の演習科目である「総合演習」と、150人近い学生を相手に大規模教室で行われる、教員からの講義を中心とした形式の「教職概論」という2つの極端に条件の異なる授業であったことに起因する。今回は、前回の2つの授業ともさらに異なるタイプ・条件での授業として、この「国際理解教育の研究」を選んで公開することにした。

「国際理解教育の研究」は、1年次に開講している学部共通科目「国際理解教育」（約100～200名受講）の講義における内容を発展させ、実際にワークショップ型・参加型のさまざまな授業実践を体験し、さらに、ディスカッションなどの演習形式によって、具体的な国際理解教育の内容に対する理解・認識や、受講者自身のもつ「国際的資質」を深められるように構成されている。したがって、毎時間、学生が作業する場面が多く、どちらかといえば「演習」に近い雰囲気を持つ。

ただし、毎回のテーマは教員の意図する授業のねらいに沿って出されている点で、学生が自ら決めたテーマに沿って研究・発表を行う「総合演習」とは異なっているし、また、毎回ペア・ワークやグループ・ワークを行いながら、それらの体験的学習を通して、国際理解教育における主要な概念や用語、知識などを身につけ、現状に対してどのように取り組んでいくか、などに関して思考したり、討論したりしていくという点で、「教職概論」のような大規模授業とも異なったタイプの授業である。

2. 本科目のねらい・シラバス・評価の視点

授業で扱った主な内容は以下のとおりである。

- ① 教育の国際化と国際理解教育の諸分野
- ② コミュニケーションー相互理解とコミュニケーション・スキルの向上ー
- ③ 相互依存ー世の中のさまざまな「つながり」を知る授業ー

- ④ イメージと認識－ステレオタイプ：偏見からの脱却－
- ⑤ フェアトレード－「貿易ゲーム」から南北問題を理解する－
- ⑥ 社会正義－「新しい惑星への旅」に何を持っていくか－
- ⑦ 難民問題－「難民」になるとはどういうことか－
- ⑧ 対立とその解決－和平協定：戦争をいかに終結させるか－
- ⑨ 変革と未来－未来を予測し、より良く変えるために－
- ⑩ 貧困－貧困の構造を知り、解決をめざすには－
- ⑪ 国際協力－「援助」と「国際協力」の関係－

(番号は授業予定回数と一致するものではない)

本時は、⑤の「フェアトレード」を扱った回であり、この時間の目標は、「貿易ゲーム」というワークショップ型授業実践を通して、先進工業国・新興工業国・資源輸出国・開発途上国などのグループに分かれてゲームを行い、その結果について話し合い、検証することで、国際社会における「相互依存」の現状や、ゲームを進めるほどに広がっていくグループ間の貧富の格差などを理解し、そうした課題の解決に取り組む関心・意欲・態度を培うことである。なお、「貿易ゲーム」(The Treading Game)自体は、1970年代に英国のNGOであるクリスチャン・エイド(Cristian Aid)によって開発されたシミュレーション・ゲームであり、今回は、開発教育国際理解教育アクションプラン研究会編、『教室から地球へ 開発教育・国際理解教育 虎の巻―一人が育ち、クラスが育ち、社会が育つ』(東信堂、2006)および、開発教育協会・神奈川県国際交流協会『新・貿易ゲーム〔改訂版〕経済のグローバル化を考える』(開発教育協会、2006)をベースにして、90分の枠内に収まるようにアレンジを加えている。

学生は5つのグループ(A―先進国(1)、B―中進国(2)、C―途上国(2))に分かれ、それぞれ異なった条件(鉛筆、色鉛筆、定規などの道具＝機械や技術、A4の用紙＝資源)の元で、お互いの手持ちの技術や資源を売買したり交換したりしながら、一定時間内にどれだけ利益を上げられるかを競う(資料「収支表」参照)。

実際にゲームを進めると、工業技術(道具)が充実している(加工がしやすい)先進国の方が、資源が充実していても、それらを製品にする技術に乏しい中進国や開発途上国よりもはるかに有利であり(色や形状が同一の「規格品」を作れなければ、商品価値が下がるため)、放っておくと、貿易不均衡と国家間の貧富の格差が広がることが目に見えて理解できる。

本時における展開は、別掲資料の「授業計画書」に示した通りである。また、本時の評価の視点(参観の視点)は、以下のように設定した。

1. 「相互依存」の授業としての「貿易ゲーム」の活動に集中して取り組めていたか(活動への関心・意欲)。
2. 「貿易ゲーム」を通して世界で起きている「相互依存」のひとつの形について理解できたか(知識・理解の獲得)。
3. 南北問題や中央―周辺理論等に見られる貿易不均衡や搾取などについて理解し、そのようなアンバランスの是正にはどうしたら良いのかについて自分なりに考えられているか(問題解決に関わる態度)。

3. 本授業に関する自評

学生の態度や、授業のまとめとして全学生から提出されたワークシートをチェックすると、1. の「貿易ゲーム」の活動への関心・意欲、2. の「世界における相互依存の現状の知識・理解の獲得」については、ゲームが進むにつれて概ねできていたことがわかる。

ただ、3. については、この時間内に十分学生たちに考察させ、話し合いができたかという、ワークシートに記入させる時間もあつたためか、必ずしも十分とはいえなかったといえる。

学生の中には、作業の過程で先進国から中進国や途上国への無償技術援助、あるいは、中進国・途上国相互の協力体制の構築などの必要性など、いくつかの改善策に気づき、ワークシートに記入していた者もいたが、先進国が一人勝ちしてしまう現状や、最初から資金や技術を持っている国の方が、資源を持っている国よりも圧倒的に有利であるという現状を理解した段階までで終わってしまっていた。本来ならば同時間内で、南北間のアンバランスな貿易構造の是正に必要な国際協力の在り方まで話し合いを進めたかったのであるが、ワークショップの時間が長引き、結果的に次週の授業の最初にフォローする形になった。体験型授業はこのように、ワークショップ、ワークシートへの感想・意見の記述、発表とディスカッション・解説など時間配分がひとつの鍵であるといえる。

4. まとめにかえて

2回目の授業公開では、昨年よりも多くの先生方にご参加戴けた結果、月曜から金曜までのほぼ全時間のコマにおいて実施することができたことは大きな前進であった。

ただし、昨年と同様、公開授業の期間中に教員相互の授業を参観したくてもやはり物理的には難しかった。空き時間に他の教員の授業を見ようと思っても、実際にはどうしても自分の仕事を優先せざるを得ない状況が生じる場合が多く、やはり、相互に参観しやすいように、3人単位でグループを作って互いの授業を順番に見て評価するなどの工夫が必要なのかもしれない。また、授業公開の期間自体を最低でも2～3週間程度とし、春学期と秋学期それぞれに実施、など、物理的な機会そのものを徐々に増やすことも肝要であろう。

今回の授業は、少人数での体験型であったこともあり、学期末の授業アンケートにおける意見・感想の自由記述欄には、「世界で起きているいろいろな出来事の構造がよくわかった」「少ない人数での授業の面白さや効果を感じた」「毎回、体験的な活動を通しての学習ができて興味深かった」等、多くの感想・意見が書かれていた。講義形式の大人数の授業でも書かれる場合もあるが、今回のようにほぼ全員がコメントを書くというケースは非常に稀であり、ある意味で教員と学生の関係が密の、少人数での体験型授業の効果であるともいえるが、こうした記述意見は、学生の満足度だけでなく、教育効果を見る場合に非常に参考になると感じた。

FDの本来の意味を鑑みるに、それは大学の授業改革のための組織的な取り組みの方法であり、換言すれば「大学教員の教育能力」を高めるための実践的方法の意味である。視点を変えれば、「教育能力」の向上はすなわち、「学生への教育効果」の向上を意味するのである。もちろん、その授業全体における「教育効果」を測る目安としてアンケート調査があるわけであるが、単に数値上の結果のみでは、その授業が本当に「良い」授業であっ

たかどうかは判断が難しい。

例えば、学生の評価で「この授業を受けて良かったと思う」の項目に平均値で 4.5 や 4.8 などが付けられていたとしても、もし試験の解答やレポートの内容に陳腐なものが非常に多かったりすれば、実はその授業で本当に学生に理解してもらいたかった到達目標を達成できていないことになる。そうなれば、その授業は、何らかの事情（例えば、履修が楽だった等）で点数的には高くても、学生への教育効果という点では必ずしも有効な授業であったとはいえないことになってしまうのである。

学生への教育効果をより客観的に判断し、授業改善につなげるようにするためには、ひとつには、今回用いられたような「授業計画書」を使って、各授業における評価の視点や、授業全体での到達目標を、教員自身にも学生にも明確にした上で授業を行うことも非常に有効である。また、必要に応じて記述式のワークシートやミニ・レポート、自前の授業アンケート（前回も述べたように、学内の共通アンケートだけでは、例えば「講義」と「演習」と「実験」と「実習」で質問の仕方を変えないと正確な調査にならないように思える項目もあるため）などを用いて、教員と学生が忌憚なく、同じ視点から多角的に授業を評価し、よりよい授業の構築につながる意見交換ができるようにすることが、FD の本来の趣旨に沿った授業改善であると考ええる。